

Title	イスパニア語のラムブダキスムス
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.35-p.44
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80457
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

イスパニア語のラムブダキスムス

伊 藤 太 吾

Del lambdacismo hispánico

La íntima relación mutua entre el lambdacismo en la Península Ibérica y él en la península itálica la planteó R. Menéndez Pidal por primera vez en 1926, diciendo que las emigraciones suditálicas en la Península Pirenaica eran las principales causas. Harto eran interesantes las discusiones debatidas respecto a la tesis pidalina por otros doctos, de modo que estos días nos podemos servir de la plenitud de documentos no usados por M. Pidal. Aprovechando los estudios supramentados, hemos criticado, sin mala intención alguna, la opinión del Ilustrísimo Doctor, que en paz descanse. Los asuntos que se tratan en este opusculum son cuatro: la distribución del lambdacismo en la Península en comparación con el resto de la Romania, la explicación de las causas, el proceso histórico del fenómeno y la cronología del hecho.

I) 標題のラムブダキスムス⁽¹⁾という術語は、すでにローマ時代から見られ、l の音価に少くとも複数の種別があった事を自ら示している。しかし、その複数の音価と言っても、調音点が歯裏であるとか歯茎であるとか、舌尖面が凸型であるとか凹型であるとかの、現在我々が音声学上問題にする様な細かな区別に困っているのではなく、主として書記の際に単文字 l を複文字 ll と書き、あるいは反対に ll である可き所に l と書くとか、又同様に、上記の様な正しくない発音に對し付けられた名称の様である。当然、尚、ローマの文法学者 Consentius の言う、長母音に後続する ll の l への縮約化への傾向も lambdacismus の一つの現象である。しかし、この術語が当時一体如何なる学問的意味を有していたのかは明らかでない。察する所、上記以外の意味は持っていなかったのではなからうか、多分。と言うのは、実は、ロマンス語への発展段階で音韻史上問題になるはずの $n \leftrightarrow nn$ の関係に言及する術語が恐らくないし、又、 $r \leftrightarrow rr$ の関係⁽²⁾もネオラテンの諸語では考察の大きな対象になるのに、それを暗示する術語がないからである。いずれにしても、本稿では筆者は lambdacismus という術語を、ロマンス諸語での音韻変化の際に、俗ラテン語で /l/ であったか、あるいはそれと関連していた音素⁽³⁾の変化する過程と新たに生成した音素を指すものとして使用したい。しかし乍ら、実は、この術語が包含する事象の全貌を示すだけでも字数に制限があるので、本稿では、他のロマンス諸語と比較してみた場合イベリア半島では lambdacismus の如何なる分布が得られ、その分布の原因はどう説明するか、さらに、それらの顕現形は音韻史上どの様にして生成したのか、最後に、問題となる変化の生成年代は何時

頃なのかの四つの問題を考察したい。

II) 筆者は基層主義を全面的には認める立場に立っていないが、その様な『主義』とは一切係りなくても、イベリア半島のロマンス語の特徴を形成する大きな原因的要素として、勿論他にも考えられるが、少くとも、ロマンス諸語と比較してみた場合に、第一にローマ化が年代的に一番早く成されたという事と、第二にアラビア語の影響を質的にも量的にも最も大きく被っていると言う二点は認めざるを得ない。⁽⁴⁾そして、そのローマ化の年代は当然の事乍ら、その形態も同様に顧慮されて然る可きであろう。嘗て、イベリア人種がコーカサス地方から渡来したという義論に際し、その経路はピレネー山脈経由とアフリカ経由の二つが主張された事があったが、ピレネー半島のローマ化の波についても同様に二つの経路が提唱された。Griera が1922年に最初に主張したのは、Baetica と Tarraconensis であり、これは、ローマ史で言う所の Hispania Ulterior と Citerior に相当する所から何人も反論の余地はない主張の様に思われた。しかし、Griera が半島の言語分布について政治上の区分を採用した為に白熱の義論が生じた。彼によれば、現在のカスティリア語とポルトガル語に相当する部分は Baetica から由来し、カタロニア語に相当する部分は Tarraconensis を中心に伝播したと言う。これに鋭い反論を唱えたのは M. Pidal⁽⁵⁾であった。ここで、彼の説に少しく耳を傾けてみよう。後述する様な結論に最初に達したのは Griera の四年後1926年であり、1954年に再度新たな資料で自説に確信を抱いている。つまり Hispania Citerior のローマ化即ち植民は南イタリア出身の人達によって行われた為に、両者の言語上の類似も当然の事であり、文化上優位にあった紀元前二世紀の南イタリア方言が Levante 地方の言語様式特に音韻形態に影響を与えているのである。両者の関連が良く現われているのは Lavernium, Beneventum⁽⁶⁾ という南イタリアの地名であり、Huesca (<OSCA) という地名がイタリアのオスク地方との関連性を決定的なものにしていると言う。これらの地名上の類似は、実は、M. Pidal にとっては他の音韻上の類似の由来を証明する為の手段であり、さらに実際の音韻の例について論考を加えているが、その前に我々はここで自問してみたい。筆者は、間違いとまではいなくても、不明確な細かな点を取り挙げて論者の非を探し出すつもりはないのであるが、学問上の正確さを期待して、精密な検討を以って論を進めたく思い、又、大前提の段階で問題点を明らかにしておかなければ、砂上の楼閣ともなり得るので、敢えて設問したい；地名上の一致若しくは類似が認められれば、直ちに言語上の関連が存在するのかと。実は、北フランスにも Beneventum に価する地名が現存しているのであるが、筆者は、その初出年代が明らかでないから、又、イベリア半島の Beneventum その他の地名の初出年代がローマ時代のものである事が明らかにされているので、架空の議論はできないが、つまり、初出年代を問題外にして、同じ地名が複数存在すれば、それらの間に必然的に言語上の一致あるいは類似があると言うわけにはいかないのは当然としても、さて、ピレネー半島と中南米との間に同じ地名が存在し、しかも、実際に年代的隔りがないにも係らず必ずしも半島と同じ変化が起っているわけでない事実及び場合によってはアメリカに於ける方が変化の生成の時期が早いという事実はどの様に説明されるだろうかという事である。⁽⁸⁾勿論、筆者はこの自問に対し拙論の後部で解答は出す予定であるが、この疑問を出す事によって、南イタリア方言と Ebro 河流域の言語上の関連説に対する疑問を投

じる代りとしたい。

Ⅲ) M. Pidal の論述はまだ続くのであるが、その前に、他の学者の意見を紹介し筆者の意見を加えたい。まず、Harri Meier は Griera の説から出発し M. Pidal の主張に修飾を加えて、先に述べた二つの流れは実は Castilla で合流し、両者の特徴を合わせ Reconquista 運動とともに南下したと主張している。そして二ヶ所の差異は、Baetica が商都としての活気に溢れた文化的生活圏であるのに対し、Tarraconensis と呼ばれる一帯は、主に軍事に関する地帯で庶民的生活が行われた所であり、その為に言語上の変化⁽⁸⁾も Tarraconensis では革新的で、AI>e, AU>o, MB>m などの変化が起り、Baetica 地方の保守性つまり、語尾の -U の保存、AI, AU, MB の保存に対立していると説明している。この説の後半は事実を述べているという点では正しい。しかし、前半の Castilla での合流に関しては筆者は賛成できない。Castilla は、ローマ時代の「合流」⁹とは関係なく、Reconquista の初期の段階で革新性を自ら獲得してそれを言語の面に表したのだと筆者は考えるからである。又 M. S. Guarnier は半島東部の革新性を交通の頻繁さに求めて次の様に言っている。「ローマの最も重要な道路が現在の Cataluña 地方を北から南に貫通していて、全ての言語上の革新はローマから起るのであるから、その交通量の為に Cataluña では革新色の強いラテン語が話されている。あと一つの道路は Tarragona からローマ化が侵透していた Lleida (Lérida) を通り Montçó (Monzón) と Osca (Huesca) を経て Saragosas (Zaragoza)⁽⁹⁾に至っていて、海岸線地方はローマ化が強度であった。」この説は「全ての言語上の革新はローマから起る」⁹という個所を削除すれば認められよう。

さて、M. Pidal は、Hispania のローマ化のエピソードを援用して先に進んでいる。即ち、Sertorius はローマに対する反乱から定住の地として現在の Huesca を選び、そこが中心となってローマ化が行われ、プルタークによれば、そこにイベリア人とローマ人の為の学校が開設された程で、ローマ化の侵透度が頷ける。更に、ギリシャの歴史学者ストラボはイタリアの Osca をギリシャ文字で *Οσκα* 又は *Οσκοι* と書いている。つまりイタリアの Osca の O は短く、アクセントのある音節だから Castilla 語同様 Aragón 方言では (H)uesca と二重母音になるのは当然であるから、両者の移住による関係は確立されたとしている。⁽¹⁰⁾ 筆者は両者の移住による関係を否定すべきいかなる正確にして有力な反対資料を持ち合せないし、むしろ、その関係を認めるのに吝かでない。しかし、この地名上の一致は飽迄も仮定であって、全ての学者達の賛同を得ているわけではない。例えば、Hübner は Osca という地名はイベリア語であろうと言っているし、Porkorny はイリュリア語を仮定しているし、Rohlf s はケルト語だと控目に主張している。更に、D'Arbois de Jubainville はリグリア語名であるとするなど諸説紛々としているのが現実なのである。

Ⅳ) ここで又、M. Pidal の説に従って先に進みたい。博士の観察によれば、Venezia 以北は背舌口蓋音であるが、残りの Campania と半島南部では捲舌音であると言う。そして /i/ が後続する場合 /l/ はより口蓋化し易いという事も言い添えており、又、Liguria, Piemonte, Lombardia などでは語中の -ll- は単子音の -l- になり、語中の単子音 -l- は -r- になるか場合によっては消失することも報告している。⁽¹¹⁾ 実は、後述の如く、この現象は gallego-portugués, ルー

マニア語などにも見られるものであって、彼自身の主張する所の Asturias やピレネー山麓とイタリア半島南部つまりオスク地方との言語上の関連性が弱くなるのではないかと安じられる報告である。更に少し地域を明確にする意味で地名を挙げると、Pescara, Caramánico, Orte 河周辺ではアクセントのある /i/ 及び語末の /u/ の影響で -ll- は捲舌化し *dd* の記号で表される。GALLINA が、だから *yaḑḑiín* となる。M. Pidal が最も特筆を望んでいるのは、実は、Campania, Lucania, Apulia, Calabria, Sicilia 島, Sardegna 島などを含む半島南部地方で、ここは上記の場所と異り後続の /i/ や /u/ に影響される事なく常に -ll- が捲舌音になるのである。そして -ll- の捲舌音の種類には、*dd* 以外に、*ll*, *r*, *ddṣ*, *ddz*, *ds*, *d* などの変種が見られ、*ll* と *r* を除けば他は全て破擦音で閉鎖を伴っているという点が注目される。これに関しては、M. Pidal はあまり関心を払っていないが、後述の如く我々にとっては重大な要素となるのである。-ll- の別の変種として捲舌性を伴わない *dd*, *d*, *r* などがあることも指摘されている。語頭の *l*- はこの地域では通常はそのままであるが時として、*dd*-, *d*-, *r*- がある事を例示している。それらは、

ḑḑángua < LINGUA *ṛati* < LACTE
ḑópa < LUPA etc. である。

イタリア半島に於ける *lambdacismus* の現象の記述はこれくらいにして、次に、イベリア半島のその特異性を明らかにしておきたい。周知の如く、ピレネー半島の言語の特質は、ローマ化が最も早く行われその結果、より古い時代のラテン語即ち *Latium* の文化的威力が弱く共通的要素に乏しい言語様式が導入された事にある。この事は、Gallia が Caesar に征服されたのは紀元前50年であり今我々が問題にしている様な特種な *lambdacismus* の現象は見当らないという事実によっても正統化され得て良き対立を成している。又、同時に注目に価するのは、基層説支持と否とに関らず、ケルト語の特質となっている多くの弛緩現象の上にラテン語が導入された事である。

V) イベリア半島に於ける *lambdacismus* でまず目につくのは語頭の *l*- の二重子音化である。しかし、その現象は現在半島全土に起っているのではない。それは、Castilla 方言を真中において、一方では *Cataluña* 方言、他方では Asturias 方言に見られるのである。この現象はどう説明されるのだろうか。構造主義の A. Martinet によれば、*l*- の保存及び消失は、*Cataluña*, *Castilla*, Asturias の三方言に於ける *pl*-, *cl*-, *fl*- のそれぞれ異なる結果と関係があるとしている。⁽¹²⁾ 即ち、*Cataluña* 語では *pl*-, *cl*-, *fl*- は口蓋化しないから *l*- が口蓋化しても意味上の対立を示す同音異義語が生じないから *l*- が生成し、*Castilla* 語では *l*- (<*l*-) は *l*- < *pl*-, *cl*-, *fl*- と対立する為に消失し、Asturias 方言では *l*- (<*l*-) は *ê*- < *pl*-, *cl*-, *fl*- と対立しない為と説明している。これに対し M. Pidal は、Asturias 方言では *ṭsuna* と *ṭsamar*⁽¹³⁾ で対立する所もあるから、Martinet の説明は失敗であると言っているが、別に「決定的な説明」をしているわけではないのである。M. Pidal にすれば、イベリア半島に於ける今まで述べて来ている変化はイタリア半島南部からもたらされたものであるという説明で十分なのかも知れないが、さらに、イタリアの揺籃の地でどの様に発生したかに対する説明が必要になっては来ないだろうか、又、IVで言及した南イタリアの語頭の捲舌音が Huesca と Asturias 地方に於て同じ条件で起っているのでは

ない事も説明されねばならない。しかし、l-<pl, cl, fl-の方がl-<l-よりも時期的に遅いと述べている点は首肯できる。それは、前者が半島内に於て地理上の広がりをも有していないことから分る。語中の-l-に関しては、西ロマンス語では-l-になるのが一般的である事を観察し、その内でイベリア半島の四つの方言つまり Cataluña, Aragón, Castilla, León のみが-l-を弛緩して-l-とならず口蓋化によって強張⁽¹⁴⁾している事実を上げ、イタリアの Osco-umbria 方言に因るものと説明しているのは一貫して変っていないのである。

VI) さて、Romania 全土で特異な存在である-l-の捲舌音による強音化の問題に入りたい。後述して明確にする予定であるが、Aragón 地方とピレネー山脈を越えた Gascogne の一帯及び Asturias の一帯の二箇所がイタリア南部と同様-l-の捲舌音による強化の現象を呈しているのは事実である。他の西 Romania は全て、-ll-に関しては、背舌面による口蓋化が起り弛緩⁽¹⁵⁾の結果を示しているのも事実である。この二帯の地方は、M. Pidal によれば、当然 Osco-lucania 由来の捲舌を保持しているのであるが、その関連性をより明確にする意味でか、ピレネー一帯の Aragón とフランスの Bearne に共通した特徴として二つ挙げている：-ll-が捲舌音である事と母音間の p, t, k を無声のまま保っている事である。しかし、残念乍らこの母音間無声子音の無声のままの保存を援用するのは場違いではなからうか？ Haudricourt や Juilland の様にバスク語の影響に理由づけを求めるまでもなく、Romania の東部ではそのまま保たれているし、さらに決定的だと思えるのは、同様に捲舌音を有している Asturias 方言では決して -p-, -t-, -k- は無声のまま保存されていないという事である。M. Pidal 自身の説によれば、ピレネー一帯で見られるこの現象と同じ現象が Asturias 方言で見られねばならないはずではなからうか？それに、-p-, -t-, -k- は -ll- と系列の違う音素であるから、-nn-, -rr- などと一緒に扱われる可きではないと思われる。

さて、イタリア半島南部との関連を主張して、イベリア半島に二種類の方法による-l-の変化、つまり捲舌化及び背舌口蓋化があるのは、¹⁶「どちらかが他方の生みの親である」と主張している。その事自体は正しい。引用すると、...podemos decir que, si bien los sonidos reversales,⁽¹⁶⁾ por ser extraños a la fonología latina, pueden degenerar en dorsales, al contrario, los dorsales, por ser un fonema común en la Romania, no pueden evolucionar hacia la extraña reversalidad; esta articulación extraña sólo puede aparecer por influjo de una causa externa.⁽¹⁷⁾残念乍ら、実は、俗ラテン語に於ける /l/ の発音方法は明確には判っていないが、Grandgent が、*“L had a convex formation, like d and t.”*⁽¹⁸⁾と言っているのは一般的意見を代表している。そして、ll と二重になってもその原理は一緒であったろう。しかし、舌面が凹型になる発音は英語はもとより、イベリア半島でもポルトガル語やカタロニア語にも見られ、俗ラテン語に於ても凹型は決して不自然で不可能な調音方法ではなかったのではないかと考えられる。しかし、この点に関しては、筆者は十分な考察はしていないので言明は避けたい。いずれにせよ、-ll-の捲舌化は、一番最初の段階でとらえてみると、-ll-の強音化の結果生れたものと筆者は考えている。数的に例が少いからとの理由でイタリア南部に借用若しくは導入の理由を求める必要はないと思われる。現代語で数的に例が少いのは、つまり、背舌口蓋音の方が圧倒的に例が多いのは、

音韻史で共通して見られる現象である弛緩の結果そのものに過ぎない。多くの歴史的事実からすれば、一旦弛緩すれば次に強張の調音を取るのが困難であり、同時に、その必要が一言語の音韻体系内になかったという事に過ぎないのではなからうか。それ由、南イタリアから導入する必要もないし、又導入するに際して実家であるイタリア南部での捲舌音の発生の説明の欠如を憂う必要もないと思われる。筆者の意見を支持するものとして、H. Lausberg は、

La pronunciación cacuminal es sustituida en amplias zonas por la articulación palatal. En dialectos suditalianos encontramos las variantes [tʃ] < [tʃ] y [g̃g̃] [d̃d̃].⁽¹⁹⁾と述べている。つまり、強音化の反対の現象である弛緩が南イタリアでも起っているのである。

VII) 実は、イベリア半島でも、捲舌音が行われている地域があと一帯 Aragón の他にあり、言語上の小島を成しているという事については上で言及したが、それは Asturias の方言であり特に Bable と呼ばれているが、しかし、その Bable 全域にわたって捲舌音が見られるのではなく、極めて限られた範囲でしかない。M. Pidal はこの Asturias 地方の捲舌音の存在を説明するのに Aragón の場合と同じ様に地名を援用し、移民の歴史的事実によって解明しようとしている。まず、前述の Aragón へのイタリア南部からの移民は紀元前 88 年の内乱によるものと言われているが、今度の Asturias への移民の原因は Augustus 皇帝と関りのあるもので、Asturias 地方の住民が Vindio (<Vindius) 山を捨てて平原に住む様に強要された事件であると言っている。その年代は紀元前 26 年で、その戦闘に参加した Augustus の養子であり後の皇帝である Tiberius の名前が形容詞の tiberica を通じて現在 Teberga という地名に残っている事や又同様に、Saliencia, Jomezana がイタリアにある地名のそれぞれ Salentini, Diomediana に由来している事を述べ、更に決定的な要素として Eo 川と Navia 川の間で Oscos という地名の存在を挙げ、イタリア南部とこの Asturias 西部との直接の言語上の関係を主張している。つまり、ピレネー地方の lambdacismus を有する住民と Asturias のこの西部の住民とは、約 50 年の隔りはあるが共に南イタリアから移住した同胞であるという主張なのである。この M. Pidal の説を支えるものとして Z. Vicente は、尚 18 世紀になっても Asturias のこの lambdacismus の住民は vaqueiros de alzada と呼ばれ、隣接の農民と区別され教区に住民登録もされていず 19 世紀になっても教会や墓地では土着の農民との同席を許されていない程の季節遊牧民であるという意味の事を言っている。⁽²⁰⁾

この様に「史実」を持ち出されては我々も反論に窮する場合が多い。しかし、幾つかの疑問が湧かないでもない。それらの内最も大きなものは、Oscos という地名が、ピレネー地方では Huesca で二重母音化しているのに、なぜ Asturias では二重母音にならないのかという事である。本来ならば、Asturias の西部では、アクセントのある短い O は ue, uo, ua の三種類に変化するはずなのであるが、現在この Oscos という地名が残っている地方は、言語地理学の明らかにした所によると、*o > ue の様な二重母音化が行われないのである。丁度 Oscos の東側で二重母音の西進は止んでいて Oscos 地方は gallego-portugués 方言区に含まれているのである。この様に二重母音が一方の Huesca では行われ、他方の Oscos では行われないという事実は、もし Huesca = Oscos だとすれば、おかしくないかと疑えよう。この地名が *Uescos, *Uoscoss,

*Uascos のどれでもなく、Oscos であるという事は、時代的にずっと遅れた別の機会に移入されたか何か別の理由で Oscos がその地名となっているのではないかと考えるが、筆者としても別に決定的な資料を有しているわけではない。更に、ピレネー地方の Huesca と Asturias の Oscos とでは性と数も異なる事を指摘しておきたい。

我々の結論を出す前に、Asturias のこの問題となっている西部 Bable 方言について簡単な記述をしておきたい。まず語頭の pl-, cl-, fl- は早い時期に ċ となったと思われ10世紀か11世紀には *pllorare (<plorare) の最初の子音が消失したのではないかとされている。この変化が起こった地方は Bable の西方部で、Villayón, Navia, Tineo などが含まれ、š (<l-, -ll-) と混同される事なく区別されるのが普通である。しかし、Bable の東部つまりあの Teberga, Quirós, Lena etc. の地方では話者の年齢による区別があり、ċ は若年層に広まり š は老年層の一般的発音らしいが、もっとも個人により、ċ と š を全然区別せず全く同一音素として使うものもいるという。尚、ここで、š の方は捲舌音とまでいかなくてもより捲舌的である事に注意が払われて欲しい。だが実の所、この様な年齢による区別が何世紀も行われて来ているのかあるいは、ただ現在そうであるに過ぎないのかは明らかでない。全ての地域で l-, -ll- が š になるのではなく、Pinera では Castilla 同様 l になっていて、この小さな地域にしては非常に複雑な様相を呈している。とは言え、西の gallego-portugués と明確な対照をなす ċ と š の二重母音化と š 圏は明瞭な一線を画している。そして、少なくともこの Bable 方言では、l-, -ll- に対し ċ, š, l の三つの音素が相当し、地域によって区別されたり混同されたりしている。その混同の中で ċ と š は調音点も類似している事もさる事乍ら、何よりもまず、それらの聴覚的類似が大きな原因であろうし、又、l は時代的には、他の二つの音素に遅れて Castilla から伝播したものであらうと考えられる。

VIII) この Bable 方言の狭い範囲内に少なくとも二ヶ所の捲舌音の小島があるのである。一つは Sisterna 地方、他は Felechosa 地方で両者の中間距離にあの Teberga が位置している。そして、肝心の Teberga では、その周辺の地域同様完全な捲舌音でなく š である事も注目に価するであらう。この二地方の捲舌音を表すのに ɖ の記号を筆者は用いるが、R. Castellano によれば、この音はイタリア語の同音と殆んど同じで、前口蓋の中程まで捲舌されて舌と口蓋との接断面が広いのが特色で共に一致していると言う。フランスの言語学者である Millardet は一時は ɖ に対しイベリア基層を唱えた事があったが最後に地中海基層を提唱して問題の解決を計った。イタリアの Merlo や Wartburg はローマ以前の地中海民族に因ると主張した。しかし、残念乍らこの Bable 地方には、いわゆる捲舌音群の中では ɖ で表される捲舌音しかなく他に類音が見当らないので説明ににくい。一方、前述のピレネー地方には ɖ の変種と見られるものが幾つか存在するので、説明の一つの方法として、その変種と口蓋湿音つまり背舌音との関係を明らかにしたいと考えている。

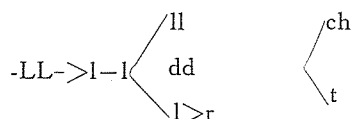
実は、ピレネー地帯で問題の現象が生じているのは Huesca 地方より少し北の部分なのであるが、-ll- が -r- となり、-ll は -t となっているし、時として -ll- が -ċ- の所も見当る。ここで注目したいのは捲舌性をそなえた -r- と -t である。Kuhn はこれらの現象の説明を次の様にしている： *ll- は最初単子音の -l- に変化した。そしてこの -l- が出発点となり、この -l- に直接対応

するのは -t- であり、-ty- という音素の由来は -l'- で表される軽い口蓋化を伴った -l- であり -ê- は -ll- が表す強度の口蓋化である。⁹ Elcock も次の様に説明している：「-ll- は最初 -l- になった。-l- が -r- になるのは多くの言語に共通した現象である。-ll- > -t- になるのはイタリアの南部で見られる -ll- > -dd- (sic) の現象と平行していて、-ty- と -ê- は -t- の地方による変種である。⁹ これらの二つの説明で共に一致しているのは、-ll- が第一段階で -l- になり、これが種々の変化の出発点となっているという点である。Kuhn は更にこの ê の変化が身近な生活に関係の深い基本語彙により多く見られる事から、時期的には遅い変化に違いないとしているが、その点は我々は納得できない。基本語彙に見られるという発見は有意義であったが、その事は必ずしも時期的に遅い事を示すものではなく、むしろ早い時期に取り入れる必要があったのではなかろうか。同じ考えに立脚して、M. Alvar⁽²¹⁾は、同地方に於ける地名に残っている接尾辞の -ELLU の三つの変化形の割合を我々に示している。

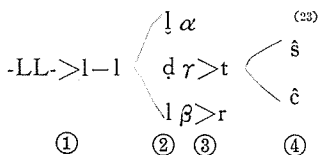
-ELLU	{	-ieto 56%
		-iello 28%
		-illo 14%

この結果を分析して Alvar は、-ieto が最も古い変化形だと断定している。-iello は古い時代のカスティリアからの借用で、-illo は勿論現代共通語からの借用形である。Alvar は同時に年代の設定も試みている。-ELLU > -ieto は10世紀以前の出来事だと観測している。その理由は10世紀には -iello の形が Castilla から借用されるからとしている。この年代考証は正しいと思う。しかし、-ll- > -ê- が -ll- > -t- よりも例がより少ないという理由で、より早く起ったと言っているのには筆者は賛成しかねる。と言うのは実は、ê の音の発生は少なくとも Castilla に於ては10世紀頃と考えるからで、このピレネーの地帯で9世紀に起ったとは思えないからである。⁽²²⁾

IX) さて、最後に、どの様に -ll- が種々の変化を生むに至ったかの過程を説明する時が来たが、その前に是非とも欠く事の出来ぬあと一つの変化形について述べなければならない。それは、-ll- > -ld- の変種である。Castilla には半教養語として、LIBELLU > libeldo, CELLA > celda などが見られるが、ピレネーのこの地帯では民衆語に多いのである。例えば、BALLESTA > gualdesta, CEROLLA > cerolda があり、バスク語からの借用語として名高い ezquerra > izquierda に見られる rr > rd の変化とともに注目に価する。この変化の意味する事は極めて有意義である。即ちIVで言及した様に、-ll- の音節の切れ目を示すものではなかろうか。ld に於ても rd に於ても d の閉鎖音は、l 又は r と音節構造上区別する為の結果だと考えられる。つまり、ラテン語の -ll- という音連鎖は、実は、二つの音節の尾と頭とであったのが、場合によっては尾の方が弱くなり、別の場合には二つが一つに融合した為に数種の変化が今日存在するのだと思われる。M. Alvar もこの音節の分割を考慮してか、



という図式で示している。筆者は次の様な図式を想定している。



この図の説明は、制限枚数が不足している事と今まで述べた事から推断できるという理由で、しない。最後に、この図式で示される変化は、M. Pidal が言う様に南イタリアからの移民による直接の借用であるのか、又は他の多くの学者達の言う様なその他の種々の基層によるものなのか、あるいは、更に、全く別の説明を要する現象なのであるかの結論を出す時が来た。思うに、このような変化は自然発生的に、イタリアの南部でも、ピレネー山岳地帯でも、Asturias 地方でも、独立して起きた現象であろう。だから、②の段階で異なる三つの形を想定した。筆者の意見では、イベリア半島やアメリカの諸国で見られる yeísmo や žeísmo の発生年代の研究の結果⁽²⁴⁾を見ても判る事であるが、yeísmo が主として都市部で発生し田舎まで伝播したと同様に、! はさらに古い段階で同じ過程をたどったのであろう。筆者が上に想定した図式の d は ! と l とともに同一線上に並んでいるが、実は、d の方が幾分より古く又同時により広い分布範囲を有していたものが、年代が進むにつれて、又地域によって湿音による弛緩現象に取って代られたのではなかろうか。捲舌口蓋音が生れる現象を筆者は調音方法の面から弛緩現象と呼んでいるが実は、捲舌音の d よりも湿音の ! の方が聴覚的に言えばより明瞭な音であるから、この進行方向が最も自然なのであり、! の中へ d が入る様な無理な現象は起こらないと、音声学の理論によっても支持される事であろう。

X) 最初に設けた四つの問題に対して、濃淡の差はあるが、我々なりの結論を出す事ができた。しかし、それは計らずも、問題の最初の提出者である M. Pidal の主張する所と相容れないものとなってしまった。批判すれば同じ様に批判されるという Alvarez 博士のご忠告、誠に同じく大方の批判を仰ぎたい。

注

- ① lambdacismus<λαμβδακισμός
- ② rhotacismus<ροτακισμός は別の現象を指す。
- ③ ʼ関連していた音素 (pl.)、とは、cl, tl, ~など種々の側面から関連性は想起され得るが、拙論で考察の対象となる音素は先に進むにつれて明らかになる。
- ④ しかし、アラビア語の影響と言っても、語彙項目に於けるものの方が音韻項目に比して大きい。
- ⑤ このイスパニアが生んだ碩学は、どちらかと言えば、歴史実証主義的で、音韻方則は存在せず、存在するのは個々の単語の歴史であって、その単語の歴史は長い年月、世紀をかけて変化を蒙るという説を終始擁護していた。そして、彼の数多くある業績の内の一つは、歴史上の資料を発掘して現在に残してくれている事である。
- ⑥ それぞれイスパニア語では、Lavern, Lavernia; Benavent, Benavente の形で現われている。
- ⑦ これらの説明には、半島に於けるケルト語の基層と中南米に於ける土語の基層も当然考慮される可き

だという学者も、R. Lenzをはじめとして多い。

- ⑧ 拙論では音韻史を問題にするので、言語上の変化と言っても、実際は音韻変化を指す。
- ⑨ カッコ内は、原文のカタロニア語を、筆者がカスティリア語にしたものである。
- ⑩ しかし、実際に南イタリアとの比較の対象になる地域は、現在の Huesca より幾分北の部分である事は注目されねばならない。
- ⑪ E. L. H. CXI, CXVIII.
- ⑫ Économie des changements phonétiques. p. 284. Berne; 1970.
- ⑬ それぞれ、カスティリア語では、luna, llamar である。⑭口蓋化全てが強張なのではない。筆者は、調音方法に関して言えば、捲舌音による口蓋音は強張だと考えるが、この場合の背舌湿音は弛緩だと考える。⑮ll>l, yなどはケルト語に共通の弛緩現象だとする学者が多い。
- ⑯ ápico-reverso-pospalatales と同じ。捲舌音を指す。
- ⑰ E. L. H. CXXII.
- ⑱ An introduction to vulgar latin. p. 121. New York; 1962年
- ⑲ Lingüística Románica p. 410. Madrid; 1970年 esp. selo. it. figlra fr. pop. diable.
- ⑳ Alonso Zamora Vicente, Dialectología Española, Madrid; 1967年
- ㉑ El Dialecto Aragonés, p. 180, Madrid; 1953年
- ㉒ 年代設定に関しては、Estudios Hispánicos 第3号の拙論を見られたい。
- ㉓ $\left\{ \begin{array}{l} \alpha \text{カスティリア形} \\ \beta \text{西ロマンズ一般形} \\ \gamma \text{早期の捲舌形} \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{弛 緩} \\ \text{強 張} \end{array}$
- ㉔ Amado Alonso, Estudios Lingüísticos, Temas Hispano-americanos, Madrid; 1967年
主な参考文献（注に挙げた以外）
- ・ Enciclopedia Lingüística Hispánica, Madrid; 1958年
 - ・ Kurt Baldinger:
La Formación de los Dominios Lingüísticos en la Península Ibérica, Madrid; 1963年
 - ・ Lorenzo Rodríguez Castellano:
Aspectos del Bable Occidental, Oviedo; 1954年
 - ・ Ramón Menéndez Pidal:
El Dialecto Leonés, Oviedo; 1962年
 - ・ Ramón Menéndez Pidal:
Orígenes del Español, Madrid; 1968年